

令和6年度「京都市地域コミュニティ活性化推進審議会」第1回第1部会摘録

〔テーマ1：地域住民をはじめ、大学や地域企業など多様な主体が地域活動に参加しやすくなるきっかけや担い手を増やす仕組みづくり〕

日時	令和6年10月31日（木）午後6時～午後7時25分
場所	京都市役所分庁舎地下1階 文化市民局 会議室
出席委員	7名（中本部会長、宇野委員、尾崎委員、河合委員、森本陽介委員、志藤会長、前田副会長）
欠席委員	1名（橋本委員）
傍聴者	3名（うち記者1名）
事務局	地域自治推進室：長谷川、平井、鳴海、早崎、小林、中野 総合企画局総合政策室 SDGs・市民協働推進担当：太田、荻原
議事次第	1 委員の紹介 2 部会長の選出 3 地域コミュニティの現状と議論の方向性等について 4 テーマ1について意見交換 5 その他（事務連絡など）
会議資料	資料1 委員名簿 資料2 座席表 資料3 京都市地域コミュニティ活性化推進条例施行規則 資料4 地域コミュニティの現状と議論の方向性等について

【議事内容】

1. 委員の紹介

2. 部会長の選出

資料3の京都市地域コミュニティ活性化推進条例施行規則第5条第4項の規定に基づき、志藤会長の指名により中本委員が部会長に就任。

3. 地域コミュニティの現状と議論の方向性等について

資料4に基づき、事務局から地域コミュニティの現状と議論の方向性等について説明。

4. テーマ1について意見交換

テーマ1：地域住民をはじめ、大学や地域企業など多様な主体が地域活動に参加しやすくなるきっかけや担い手を増やす仕組みづくり

<主な意見>

宇野委員：私達の活動に参加してくれている学生の中にも、活動が続く学生と続かない学

生はいる。地方から出てきている学生は、その活動を居場所としてつながりを求めているという背景があるのか、続いているように感じる。活動を継続することで、経験を積み重ねることもできるし、成長を感じてもらえたら嬉しい。

子どもを相手にした活動をしているので、大学生の方が体力もあるし、勉強も教えてもらえるので助かっている。学生が参加するきっかけについては、大学のゼミなどで話をするようになったことで個別に問合せをくれるようになったり、ホームページなどで調べて「ボランティアをしたい」と問い合わせしてくれることもある。

子ども食堂は、料理を提供することから、栄養学を勉強している学生や、保育や教員の免許を取りたい学生、社会福祉を勉強したい学生なども来てくれており、受入の幅が広いように思う。

森本委員：地域の中で育った恩返しとして、地域に関わり続けたいと思い、地蔵盆を通じた地域団体との交流などを行う学生団体 edunka の活動を行っている。活動をする上では地域への関心の有無がすごく大きいと感じている。地域活動に関わる大学生の意向を調査したアンケートでは「活動に参加してどのようなところが『よくなかった』ですか」という質問で「ただの無賃労働者としてしか考えていないような扱いをされた気がしたから」という意見があったが、大人・学生・子どもと分けて考えられることが多く、大学生も「大人」として扱ってほしいと感じることがある。

地域にしっかり入り、一から一緒にやらせてほしいと思っている学生がいる一方で、単なる人手として考えている地域団体の方もいる。お互いの意思疎通をしっかりと取ることで、学生の継続性も上がるのではないかと思うので、学生を受け入れる町内会側にも「一緒にやろう、一緒に考えよう」というスタンスでいてもらうことが大事。

前田副会長：何か特定の専門分野というより、その地域と関わりながら活動したいという思いを持っている学生もおり、ただ単に無償のボランティアではなく、地域の一員として責任を感じながら関わることで、無償であっても、お金じゃないところでやりがいにつながっているのではないか。

森本委員：自分達がやったことに対して「ありがとう」「一緒に出来て良かった」と声をかけてもらうことが達成感になり、次につながっていくはず。

edunka の活動を始めて2年になり、2年連続で同じ町内会の地蔵盆に関わったが、1年目と2年目で関わり方に違いを感じた。1年目は町内会の方も手探りの状況で、町内会の方と一緒にミーティングや予算決めなどから関わり、一

緒に作り上げた感覚があったが、2年目は昨年度の実績があるため型が決まっております、一部の役割のみを担っただけになった。今後の関わり方についてはもう一度見直して、町内会とも話し合いたいと感じた。

前田副会長：確かに1年目は手探りで、2年目は形式的になってしまうことがあり、特に先輩は役割を与えられるだけになってしまうことが多いかもしれない。

京都橘大学から毎年100人以上の学生が関わっており運営も任されている中本部会長の地域の活動を教えていただきたい。

中本部会長：おやじの会主催の夏まつりやキャンプのイベントを京都橘大学の児童教育学科のボランティアサークルと救急救命サークルの学生に手伝ってもらっている。キャンプは、企画や運営まで全て学生に任せており、学科やサークル特有のプログラムを組み込んでもらうことで、学生の得意なことを活かしてもらうようにしている。

教員を介してはおらず、学生だけで引き継ぎながら活動を続けている。コロナ禍でも学生の工夫によりこれまで学校で行っていた肝試しを動画配信の形に変えて実施した。

学生自身も自分の専門分野を活かしてボランティアをしたいという思いは持っていると感じる。キャンプの参加者も現在約220名になり、運営が大変になるので、参加人数を絞ろうかと学生に提案したが、「自分達がもっと頑張るので全員参加させてあげてほしい」と言ってくれた。本当にありがたく思っている。

課題としては、私の学区の取組を知り、他の学区から「学生を紹介してほしい」と言われることがあるが、交通整理をお願いしたいなど、ただのお手伝いのような関わり方を求められることもある。相談があった際は相談者と話をし、学生につなぐか検討するようにしている。

河合委員：地域企業として地域活動に参加するのは当然だということなどから、祭りの巡行の手伝いなどは積極的に出るようにしている。ただ、イベントの規模などによっても地域企業に望まれることは違うように思う。日常的に関わってほしいという訳ではなく、単発的にイベントに人手として出してもらいたいと望まれることがある点については、地域企業に対しても学生に対しても同じなのかもしれない。飲食店などであれば、屋台を出すなどの分かりやすい関わり方ができるが、そうでない地域企業の方が多いので、そうすると寄付や清掃活動、スペースの貸出ぐらいでしか関われないのではないかと。地域企業には「役はやらなくていいので町内会費を高めに払ってほしい」と言われることもある。「そうい

うものだ」と割り切っているところはあるが、ボランティアといっても、地域活動に関わりたいと思っている人と、地域団体との間にはギャップはあると思う。

前田副会長：学生と地域企業の地域活動に対する目的や考え方は、違うところもあるかもしれないが、いずれにしても地域団体側の思いと、企業や大学などとのマッチングが、「仕掛け」や「連携強化」といった部分でもう少し考えていくべきところ。

河合委員：森本委員の話を聞いて思ったが、大学生は4年で卒業してしまうので、どうしても助っ人として頼られてしまう部分があるのではないか。一方、中本部会長の取組は、学科から学生が来ているので、大学が移転でもしない限り途絶えることがない。個人としての関わりか、組織としての関わりかによって、継続の担保感が違うと思う。

森本委員：今は学生団体として有志で取り組んでいるが、活動を広げれば広げるほど人数が足りなくなるので、地域の行事などに興味関心がある学生を更に集めなければいけないと感じている。人数が確保できて体制が整い、様々な地域に出向いてつながることで、継続の担保感が生まれるのかもしれないが、現在は20名程度で回している。この体制では活動する地域の幅を広げていくのは難しいので、自分達のような団体が各大学に1つあればいいとも思う。

宇野委員：地域活動に関するアンケートにもあったが、活動に参加しない理由に「十分な情報がない」という意見も多かったので、対面でのマッチングの場があると、より活動につながっていきやすいのではないか。

尾崎委員：私の住む学区では、田畑が戸建ての新興住宅地に変わる度に、若い世帯が引っ越してくるので人口は増えているが、町内会に入ってくれないことが課題になっている。近くに大学もなく、銀行や郵便局、病院がある程度で、企業もないので、皆さんの話をとてもうらやましく聞いていた。同じ京都市内でも地域格差をすごく感じる。

3年前から3学区共同で、健康福祉まつりというイベントを年に1回開催しているが、年々参加者が減っており、中学生のブラスバンドや子ども達のダンスの披露の時間ぐらいしか人は集まらない。一度地域活動に関わってもらえれば楽しいと思ってもらえるはずなので、工夫をしてイベントなどの参加を促したい。

中本部会長：遠い地域から来ていただける大学のボランティア団体などもあると聞いたことがある。今年の勸修小学校の運動会では、学校の先生が探して京都文教大学の学生ボランティアに手伝いに来てもらっていた。地域の行事に大学生に来て

もらうことで、新たなコミュニティにつながっていくかもしれない。

宇野委員：私の活動では、大学のボランティアセンターを通じて活動に参加する学生はあまりいない。

森本委員：上京朝カフェなどにもボランティアセンターの方が参加していたりするが、何か新しいものを創出する機会を求めている大学生とのマッチングのような機能があればと思うことはある。ボランティアセンターは直接行かないと情報を得られないので、広報板など、普段歩いている時に目に止まるツールの方が地域活動に興味を持つきっかけになると思う。

宇野委員：行政がボランティアの説明会の企画や、NPOや町内会のマッチングの場を設けてくれるとありがたい。

森本委員：学生同士が関わる機会がない。上京朝カフェに参加したことで、ようやく他大学の学生と関わりを持たせたが、そのような場に足を運ばないと他大学や同じ大学の別のサークルの学生と関わる機会がない。

中本部長：勸修学区の例でいうと、同じ京都橘大学の学生でも学科が違くと全く関わりがないようで、活動を通じて初めて交流が生まれている。地域活動を通じて様々な交流が生まれて欲しい。

宇野委員：先日開催された唐橋西寺公園秋祭りの会場で、手伝いに来てくれた開建高校の学生が地域の企業を訪問するという取組を行っており、出展企業に直談判して企業と高校生がつながった事例があった。元々は子ども食堂の普及を目的としたイベントだったが、出店企業や参加した学生のそれぞれの目的が、交流することで達成されるような機会や場があったらよいのではないかな。

河合委員：地域活動への関わり方には、単発で大きなイベントに関わるパターンや、年間通じて継続的に関わるパターンなど様々あると思うが、学生が地域と関わりを持ちたいと思っても、アルバイトなどで忙しく、なかなか継続的に関わるのが難しい。単発でも地藏盆などのイベントなどで企画からやらせてほしいと考えている学生がいれば、地域団体側も思い切って全て任せてみるという心意気が大事なのではないかな。

尾崎委員：大学に地域のイベントに来てもらうようお願いをするという発想はなかったもので、今後考えてみようと思う。

前田副会長：ボランティア活動は専門性を活かすこともできるし、同じ属性以外の方と関わることもできる。

志藤会長：この審議会では、地域コミュニティをどのように活性化させていくか、というテーマで議論を進めているわけだが、地域に住んでいる人が変わらないのであ

れば、これまでの「やらねばならない」という発想をいかに変えていくかが1つの焦点となっていくように思う。各委員の今の取組の中にも、何かヒントがあると思うので、それぞれの立場で今後の審議会や部会で議論を進めていきたい。

事務局：本日は、熱心な議論をいただき、御礼申し上げます。本日いただいた御意見については、事務局で整理のうえ、次回部会で引き続き、意見交換をお願いしたいと考えている。

次回部会は、12月開催を予定しているのですが、日程調整のうえ、改めて御連絡させていただきます。